

# ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究 I

—— 高齢者介護による成長・発達感とその関連要因の分析 ——

岡本 祐子

(1997年10月1日受理)

A Study on Identity Development by Care - Giving I :  
An Analysis of the Feelings of Growth and Development by Caregivers  
to Elders and Their Related Factors .

Yuko OKAMOTO

Identity development in adulthood has two aspects , that is , personal identity and care - based - identity . however , a lot of the previous researches on identity development have paid attention only on the aspect of personal identity . The present study was designed to consider identity development by care - giving empirically . The purpose of this study was to investigate the feelings of growth and development by care - giving to elders and the related factors to promote them .

Data was obtained on the basis of questionnaire distributed to 125 men and women belonging to the following 3 groups: [ Group I ] 79 caregivers to elders at their home , [ Group II ] 23 caregiving staffs in old aged homes , and [ Group III ] 23 men and women who did not have caregiving experiences to elders .

The results were summarized as follows:

1 ) No significant difference was found in the scores of the feelings of growth and development by caregiving among the three groups above . However , the scores of Group I were widely distributed , and it was suggested that there was a large individual variations of the caregiving experience .

2 ) The following factors were suggested as the promoting factors of the caregiver's feelings of growth and development by caregiving : ① positive feeling and attitude for caregiving , ② positive relationship with care - receivers , ③ positive acceptance to the care - receiver's life , and ④ high level of identity .

Key Words: Identity development , Care - Based - Identity , Care - giving , Care of elders .

## 1. 問題および目的

### (1) 個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティ

ライフサイクルを通じて見られるアイデンティティの発達に関する研究は、生涯発達心理学の進展と並行して、1980年代以降、次第に増加しつつある(鍵・宮下・岡本, 1995, 1997)。これまで、アイデンティティの発達は、多くの場合、いわゆる個としての発達の側面

から論じられてきた。しかしながら、成人期のアイデンティティは、単に、個としての発達の側面のみならず、関係性、つまり他者とのかかわりの中で、発達、深化していく側面も重要であろう。岡本(1995, 1997)は、成人期のアイデンティティ発達におけるこの「関係性」の側面のもつ意味を理論的に検討し、成人のアイデンティティ発達と成熟性は、表1に示したような2つの軸でとらえられることを示唆した。

第1の軸は、個としてのアイデンティティの発達で

ある。これは改めて述べるまでもなく、「自分とは何者であるか」「自分は何になっていくのか」という個の自立・確立が中心的テーマである。個としてのアイデンティティの発達には、積極的な自己実現の達成へ向けて方向づけられる。もうひとつの軸は、これまでのアイデンティティ研究において重視されることが少なかった関係性にもとづくアイデンティティの発達である。この中心的テーマは、「自分は誰のために存在するのか」「自分は他者の役に立つのか」という問題である。関係性にもとづくアイデンティティは、他者の成長や自己実現への援助へ向けて方向づけられる。成人期のアイデンティティの発達には、この両者が等しく重みをもっており、両者が統合された状態が本当に成熟した大人のアイデンティティであると考えられる。

個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティは、相互に影響を及ぼし合い、深い関連性をもっている。たとえば、他者の成長や自己実現への援助ができるためには、個としてのアイデンティティが達成されていることが前提である。これは、親が子供を育てること、教師が生徒を教育すること、専門家として後進を育てることなど、さまざまな領域に

おいていえることである。また、本当に他者に対してよい成長への援助ができるためには、常に個としても成長・発達をしつづけていることが重要である。

それに対して、関係性にもとづくアイデンティティが、個としてのアイデンティティの発達にどのように貢献するかという問題は、これまで注目されることが少なかったと思われる。それは、アイデンティティの発達にとって関係性にもとづくアイデンティティのもつ意味そのものが重視されてこなかったためであろう。しかしながら、他者の役に立っているということによる自信や自己確信ばかりでなく、他者を世話する営みを通して養われる生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、——これは危機対応力と呼ぶことができるであろう——、自我の柔軟性やしなやかさの獲得などは、他者への深い関心や関与を通じて得られた、個としてのアイデンティティの成熟性といえるのではないであろうか。成人期のアイデンティティの発達にとって、関係性にもとづくアイデンティティの重要性を実証に検討することは、きわめて重要な課題であろう。しかしながら、現在のところ、このような視点にもとづく研究は、行われていない。

表1 成人期のアイデンティティをとらえる2つの軸(岡本, 1997)

	個としてのアイデンティティ	関係性にもとづくアイデンティティ
中心的テーマ	自分は何者であるか 自分は何になるのか	自分はだれのために存在するのか 自分は他者の役に立つのか
発達の方向性	積極的な自己実現の達成	他者の成長・自己実現への援助
特徴 (山本, 1989による)	1. 分離-個体化の発達 2. 他者の反応や外的統制によらない自律的行動(力の発揮) 3. 他者は自己と同等の不可侵の権利をもった存在	1. 愛着と共感の発達 2. 他者の欲求・願望を感じとり、その満足をめざす反動的行動(世話・思いやり) 3. 自己と他者は互いの具体的な関係の中に埋没し、拘束され、責任を負う
相互の関連性・影響	①個としてのアイデンティティ⇔関係性にもとづくアイデンティティ ・他者の成長や自己実現への援助ができるためには、個としてのアイデンティティが達成されていることが前提となる。 ・他者の成長や自己実現への援助ができるためには、常に個としてのアイデンティティも成長・発達しつづけていることが重要である。 ②関係性にもとづくアイデンティティ⇔個としてのアイデンティティ ・他者の役に立つことにもとづく自己確信と自信。 ・関係性にもとづくアイデンティティの達成により、生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、危機対応力、自我の柔軟性・しなやかさが獲得される。	

## (2) 成人期の発達における「ケアすること」の重要性

今日は、「共生の時代」といわれるように、これからの社会は、もはや個人の福利だけを追及していたのでは、個人そのものも社会も維持できなくなってきたことが認識されつつある。そして、他者の成長や自己実現を援助しつつ、自らも自己実現を達成していくという課題に一人一人が取り組んでいかねばならない時代になってきているのではないであろうか。この「関係性」を支える重要な鍵概念のひとつが、「ケア」(care, 世話・介護・看護)ということである(岡本,1995)。ケアすること・世話役割は、成熟した共生関係の構築のためには不可欠の重要な意味をもっているにもかかわらず、これまで長い間、世話することの意義は、社会的にも学問的にも軽視されてきた傾向がある。学問的には発達心理学の視点から、最近ようやく子育てによる親の側の発達が注目されるようになった(柏木・若松,1994)にすぎない。

反対に、子育てや老親の介護など、家族内の異世代の世話を通じて共生関係を構築することが、困難な問題であることは、数多く指摘されているところである。特に、高齢少子化社会の到来にともなって、老親の介護者のストレスの増大やアイデンティティ喪失感などが指摘されている。例えば、1人の家族が介護の責任を全面的に任されるという事態は、ともすれば介護者になった者が、介護役割に自分の全生活を奪われ、社会人としての生活や個としてのアイデンティティの喪失を生じさせることにもなる(Kaff & Pearlin, 1992)のである。

本研究は、関係性、特にケアすることによるアイデンティティの発達を実証的に検討するための基礎研究として行われたものである。柏木・若松(1994)は、子育てすることによる親の側の成長・発達に注目し、日々、自ら手をかけて子育てしている母親は、そうでない父親よりも、「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生きがい・存在感」「自己の強さ」などの人格特性を獲得していることを見出し、これらを親となることによる成長・発達に関する因子と名付けている。高齢者の介護も、子育てと同様、単に「介護する者」と「介護される者」という一方向的な関係ではなく、高齢者の世話を通じて介護する側も多くを学び、成長・発達していく関係としてとらえることはできないであろうか。柏木・若松(1994)の研究で見出された6つの因子は、いずれも、介護体験を通じても獲得される特質であるように思われる。

実際に、高齢者の介護や世話をしている人々は、その介護体験をどのように受けとめているのであろうか。介護に携わることによって、人生の実相を学ぶ、他者

の喜びを自分の喜びとすることができる、忍耐強くなる、他者に対して思いやり深くなる、ものごとを現実的にあるいはプラス思考で考えられるようになる、などのいわゆる人格の成長感を体験するのであろうか。また、もし成長感の体験に個人差があるならば、その個人差は何に由来しているのであろうか。

## (3) 本研究の目的

本研究は、このような問題意識にもとづいて、

- ①高齢者介護にたずさわることによる介護者の側の成長・発達感の実態、
- ②高齢者介護による成長・発達感に関連する要因、について検討することを目的とした。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者：

I 在宅介護者群(在宅で家族を介護している者)79名(男性7名,女性72名,平均年齢53.1歳,平均介護年数4年3カ月)、II 施設職員群(養護老人ホーム、老人保健施設の介護職員)23名(男性5名,女性18名,平均年齢35.4歳)、III 一般群(介護体験のない者)23名(男性5名,女性18名,平均年齢51.2歳),合計125名を対象とした。第III群は、統制群として設定した。対象者は全員、広島県内に在住している。

### (2) 手続き：

以下の内容からなる質問紙調査を実施した。

- 1) 介護体験による成長・発達感に関する5ポイント・スケールの質問,10項目。  
予備調査をもとに、介護に携わることによって体験されるであろう成長感を、次のように仮定した。
  1. 介護し看取ることによって、自分は成長した。
  2. 私は、介護し看取ることによって人生の実相が学べた。
  3. 私は、介護し看取ることによって自分の人生を今までより豊かなものにできた。
  4. 私は、他者の喜びを自分の喜びとすることができるようになった。
  5. 私は、介護し看取ることによって、以前よりも忍耐強くなった。
  6. 私は、介護し看取ることによって、人に対して深い思いやりがもてるようになった。
  7. 私は、介護し看取ることによって、以前よりも現実的になった。
  8. 私は、以前よりも物事をプラス思考で考えられるようになった。

9. 私は、以前よりも人とのつながりを大切にするようになった。

10. 私は、以前よりもつらいことや苦しいことがあっても、乗り越えていける強さをもった。

これらの項目には、「最もよくあてはまる」(5点)～「全くあてはまらない」(1点)を与えた。したがって、得点が高いほど、成長・発達感が高いことを意味する。

2) 介護に関わる感情・態度に関する項目:

A 介護に対する感情、B 要介護者への接し方・受けとめ方、C 要介護者の人生の受けとめ方、D 介護者自身のアイデンティティ意識、E 老いに対する感情、の5つの側面に関する項目を、それぞれ7～12項目ずつ設定し、それを介護者自身がどのように意識・体験しているかを、5ポイント・スケールで評定してもらった。

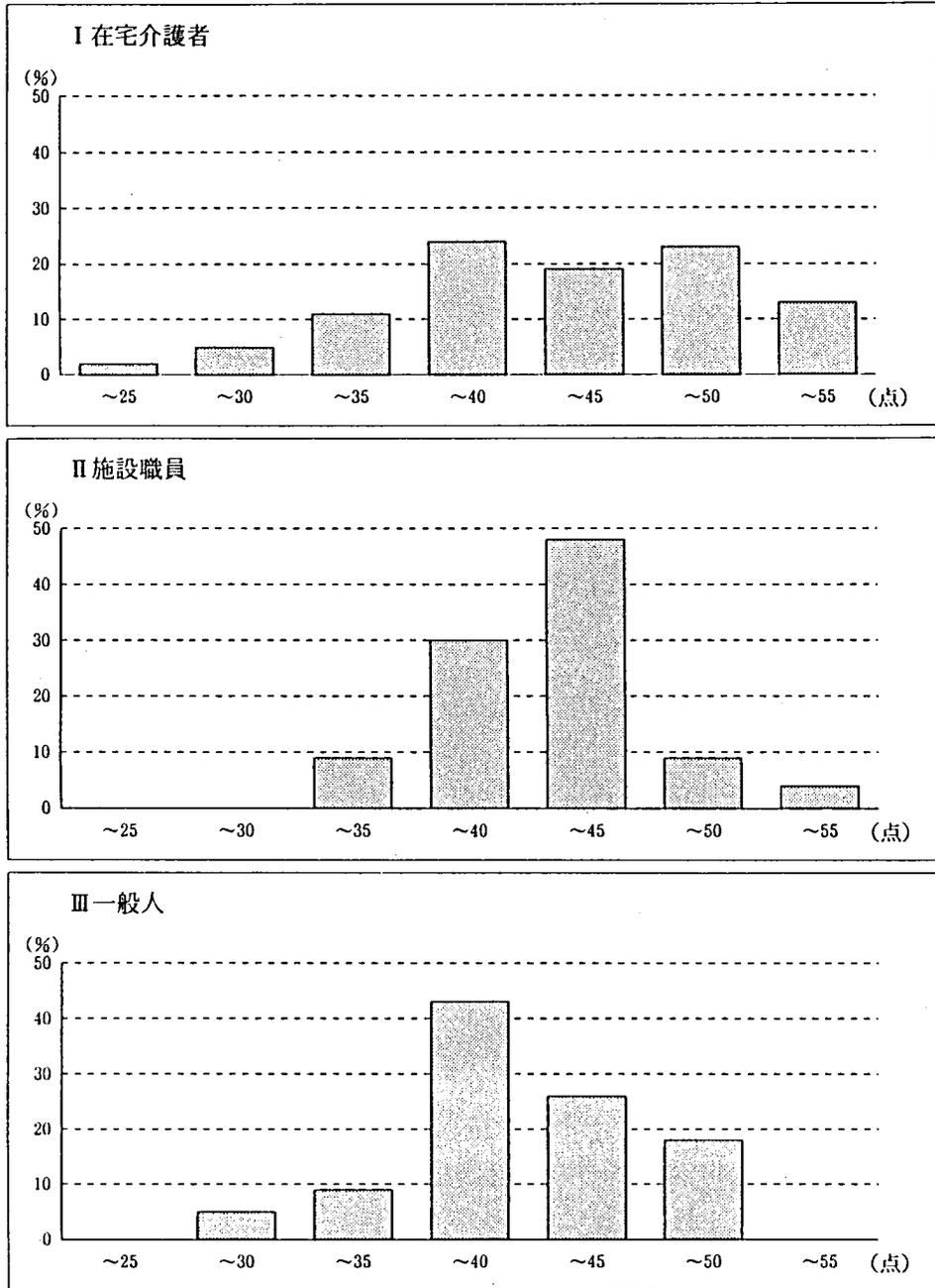


図1 介護体験による成長感得点の分布

これらは、介護体験による成長・発達感に影響する要因であると仮定した。その主要な項目は以下のとおりである。

A 介護に関する感情：

- ① 介護はつらい。
- ② 介護は自分の時間をとられるので腹立たしい。
- ③ 介護はやりがいのある仕事だ。
- ④ 介護をするのは、自分が今までお世話になった分の恩返しである。
- ⑤ 介護は義務であり、できればしたくない。

B 要介護者との接し方・受けとめ方：

- 1 私は介護している人の身体的、精神的障害をそのまま受け入れられる。
- ② 私は介護を受けている人の老いていく姿を見て、やりきれなさを感じる。
- 3 私は介護を受けている人の話し相手によくなっている。
- 4 私は介護を受けている人と意志疎通がよくできていると思う。
- 5 私は介護を受けている人から精神的に支えられていると思う。

C 要介護者の人生の受けとめ方：

- 1 私は介護を受けている人の人生を、かけがえのないものだと思う。
- 2 私は介護を受けている人を人生の先輩と思い尊敬している。
- 3 私は介護を受けている人が、自分の人生を満足しているように思う。
- ④ 私は介護を受けている人の人生は報われなものだと思う。
- 5 私は介護を受けている人の人生は、私の人生と通じるものがあると思う。

D 介護者自身のアイデンティティ意識：

- 1 私は自分の果たすべき役割がわかっている。
- 2 私は生きている意味がはっきりわかっている。
- 3 私は自分の今までの人生を受け入れ、満足している。
- 4 私は人から認められていると思う。
- 5 私は、喜びや愛を生み出す力をもっている。

E 老いに関する感情：

- ① 老いていくことはむなしなものである。
- 2 老いることは自然なことである。
- ③ 私は、将来老いていくと役に立たなくなるだろう。
- 4 年をとることは、若い時に考えていたより

もよいことだと思う。

- 5 私は年をとっても若い時と同じように幸せであると思う。

(○は、否定的意味をもった項目であり、逆転させて得点化する。)

統制群である介護体験のないⅢ一般群の人々に対しては、成長感については、「今の私は5年間前より成長した」「私は5年前より人生の実相をよく知っている」というように、この5年間の成長感について回答を求めた。また、「介護に関する感情」「要介護者に対する接し方・受けとめ方」「要介護者の人生に対する受けとめ方」については、調査対象者に対して「あなたの親または伴侶が老衰や病気により、日常ベッドの上で過ごし排泄や食事などの介護を要するようになり、あなたが自宅で介護しなければならなくなった時のことを想定して答えて下さい」と教示して回答してもらった。

### 3. 結果および考察

#### (1) 介護による成長・発達感の分析

介護による成長・発達感の平均得点は、I 在宅介護者群, 43.82 ( $SD$  7.67), II 施設職員群, 43.78 ( $SD$  4.64), III 一般群 42.13 ( $SD$  4.75) であり、 $t$ 検定の結果、3群間に有意差は見られなかった。しかし、図1に示したように、その成長感の得点分布には、3群間で大きな相違が見られた。II 施設職員群やIII 一般群では、その成長感得点は平均値のあたりに集中しているのに対して、I 在宅介護者群の場合は、非常に高く成長感を感じている人からほとんど成長感を感じていない人まで幅広く分布していた。このことは、在宅介護者の介護にともなう成長感の体験には非常に個人差が大きいことを示唆している。

#### (2) 介護に関わる感情・態度得点の分析

次に、介護による成長感に関連すると考えられる介護に関わる感情・態度得点について分析した。

結果は表2に示したとおりである。分散分析の結果、3群間に有意差が見られたのは、A 介護に関する感情についてのみであった。3群の中でII 施設職員群の得点をもっとも高く、高齢者の介護に対して肯定的な感情をもっていることが示唆された。これは、職業として勤務時間の範囲内で、しかも複数名で協力して介護を行っている施設職員は、ほとんど自分1人で24時間体制で、自宅で介護しているI 在宅介護者群よりも、介護にともなうストレスや否定的な感情が低いことを示唆するものであろう。

(3) 介護による成長感に関わる要因

(1)で述べたように、在宅介護者群の成長・発達感には、非常に個人差が大きいことが示唆された。そこで次に、介護体験のあるⅠ在宅介護者群、Ⅱ施設職員群のみを対象にして、介護による成長感に関わる要因について分析した。つまり、介護することによる成長感には、A～Eのどの要因と関連性があるかについて検討した。成長感得点の高低によって、表3のように、「成

長感大」群、「成長感中」群、「成長感小」群の3群に分類し、A～Eの要因の得点の相違を検討した。

表3 介護による成長感得点による分類

	成長大群	成長中群	成長小群
得点 (点)	55～46	45～36	35以下
人数 (名)	46	44	10

表2 介護体験による成長感および介護にかかわる感情・態度得点

調査対象者		Ⅰ群 在宅介護者 (79名)	Ⅱ群 施設職員 (23名)	Ⅲ群 一般人 (23名)	有意差検定
A 介護に関する感情 (7項目)	M	23.62	27.59	21.87	Ⅱ > Ⅰ * Ⅱ > Ⅲ *
	SD	5.58	5.18	4.07	
B 要介護者に対する接し方・受けとめ方 (9項目)	M	31.67	32.70	32.35	n.s.
	SD	5.53	4.80	3.76	
C 要介護者の人生の受けとめ方 (7項目)	M	23.58	23.32	24.91	n.s.
	SD	5.09	4.23	3.52	
D アイデンティティ意識 (9項目)	M	35.10	30.70	33.96	Ⅰ > Ⅱ *
	SD	5.97	4.93	4.09	
E 老いに関する感情 (12項目)	M	38.91	36.91	38.70	n.s.
	SD	7.11	5.62	5.98	
F 介護体験による (又はここ5年の) 成長感 (11項目)	M	43.82	43.78	42.13	n.s.
	SD	7.67	4.64	4.75	

\* p < .05

表4 成長感の程度からみた介護にかかわる感情・態度得点

対象者群		i 成長大群 (46名)	ii 成長中群 (44名)	iii 成長小群 (10名)	有意検定
A 介護に関する感情 (7項目)	M	26.60	23.18	22.50	i > ii *
	SD	5.20	5.70	6.77	
B 要介護者に対する接し方・受けとめ方 (9項目)	M	34.71	30.09	26.10	i > ii * i > iii * ii > iii *
	SD	5.10	4.17	5.24	
C 要介護者の人生の受けとめ方 (7項目)	M	25.07	23.00	20.00	i > iii *
	SD	4.77	4.77	4.19	
D アイデンティティ意識 (9項目)	M	37.02	31.68	29.60	i > ii * i > iii *
	SD	5.39	5.22	5.06	
E 老いに関する感情 (12項目)	M	38.89	38.02	38.90	n.s.
	SD	7.37	5.98	7.82	

\* p < .05

結果は表4のとおりである。分散分析の結果、E「老いに対する感情」以外はすべて、「成長感大」群が「成長感小」群よりも有意に高い得点を示していた。このことは、介護者が肯定的な気持ちをもって介護にあたっていること、要介護者に対してもよく意志の疎通がとれ、受容的な態度で接していること、また要介護者の人生を尊重して肯定的に受けとめていること、そして介護者自身もしっかりとしたアイデンティティ意識をもっていることが、自分自身の成長感の体験につながっていることを意味している。

これらの結果より、他者を尊重し、より深い関係性をもてることが、介護という大きな困難をともなう役割のストレスを軽減し、さらに自分自身の心の発達を促進させることが示唆されたと考えられる。

#### (4) 今後の課題

高齢少子化社会を迎えた我が国において、高齢者の介護・看取りは最も重要な課題の一つである。よりよい高齢者介護の実践のためには、単に福祉、経済的支援のみにとどまらず、心理的な次元においてもよい介護-被介護関係の達成に注目していく必要がある。その基本的なヴィジョンは、個を大切にしながらの世話役割の実践、個としてのアイデンティティを達成しながら他者の生活と自己実現をも援助していくという考え方であろう。本研究は、このような真の共生関係を構築していくための基礎研究として行われたものである。本研究によって、介護者が被介護者より深い関係性をもてることで、介護役割を遂行する上で重要な役割を果たし、さらに介護者自身の成長・発達感を促すことが示唆された。今後さらに、このようなよりよい介護-被介護関係を達成するための要因、特に介護者にとって、世話役割にともなう心身の負担や時間的拘束という物理的な困難さが、個としてのアイデンティティや家族に対する愛情を蝕んでしまわないための方策や援

助を考察していくことが、重要な課題であると思われる。

## <付記>

本研究は、平成7・8・9年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)「成人女性のアイデンティティ発達過程と危機状態に関する研究」(課題番号 07610132, 研究代表者 岡本祐子)の一部として行われたものである。研究協力者としてデータ収集にご協力いただいた三崎いづみさんに感謝いたします。

## 引用文献

- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み  
発達心理学研究, 5, 72-83.
- 岡本祐子 1995 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について：理論的展望と生活レベルに見られる2,3の問題. 広島大学教育学部紀要 第2部 44, 145-154.
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学 ナカニシヤ出版.
- Skaff, M. & Pearlin, L. 1992 Caregiving: Role engulfment and the loss of self. *The Gerontologist*, 32, 656-664.
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1995 アイデンティティ研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版.
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版.
- 山本里花 1989 「自己」の二面性に関する一研究：青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討. 教育心理学研究, 37, 302-311.